■ IICLO MAGAZINE NO.195---------- 2026/11/20
★★★ 大阪国際児童文学振興財団 メールマガジン ★★★

一雨ごとに寒さが増し、コートと手袋が必要な季節になりました。
現在会員登録数 4,823 人さま。次号は 12 月 22 日発行の予定です／

＋－－－－－－－－－－　◇◆◇　目次　◇◆◇　－－－－－－－－－－＋

【１】お知らせ
【２】コラム
《１》この本読んだ？
《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
《３》子どもの本の珠玉のことば
《４》行って来ました！
《５》宮川健郎　私の出会った児童文学者たち
《６》富安陽子　ＩＩＣＬＯ　ストーリーコンペ　第４回
【３】全国のイベント紹介
【４】プレゼント

＋－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－＋

■－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－■
【１】お知らせ
■－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－■

●フォーラム「デビュー40 周年記念　富安陽子と仲間たち」開催のお知らせ
皆さん、こんにちは。一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団（IICLO）理事長の富安陽子と申します。

私は 20 代の頃から､子どもたちのための物語を作る仕事を続けてきましたが、早いものでデビュー作『やまんば山のモッコたち』の刊行から今年で 40 年目となりました。

この 40 年の間に児童書出版を取り巻く状況は大きく変わり、また、デビュー当時から永きにわたって一緒に本を作ってきた編集者の方々も今、リタイアの時期を迎えようとしています。そういう意味でも 40 周年という節目は私にとって一つの大きな転換期になる気がしています。

そこで今回、今まで私と共に、絵本やシリーズ読み物を作ってきてくれた画家さんや編集者の皆さんに集まってもらってこれまでの仕事を振り返り、一冊一冊の本がどうやって生まれてきたのかを語り合いたいと思っています。

人気シリーズ誕生の裏話や、苦労談、失敗談等々、他では知ることのできないエピソード満載のフォーラムになることと思います。ご興味のある方はぜひ、来年 1 月 23 日（土）大阪府立中央図書館のライティホールに足をお運びください。

文庫活動をしておられる方、学校や図書館の司書の方、私の本の読者の皆さん、出版各社の皆さん、同業者の皆さん、同級生やご近所さん……。たくさんの仲間たちがデビュー40 周年記念の日に集まってくださることを願っております。

フォーラムの詳細や申し込み方法は以下をご参照ください。

みなさまのご参加をお待ちしています。
・日時：2027年1月23日（土）　13：00～16：00
・講師：富安陽子（児童文学作家、IICLO理事長）、大島妙子（絵本作家）、
　宮川健郎（武蔵野大学名誉教授、IICLO理事）、西裕子（福音館書店）、
　広松健児（偕成社）、松永緑（ポプラ社）、松本徹（元福音館書店）、
　芳本律子（元理論社）
・場所：大阪府立中央図書館 ライティホール　※参加費1000円
※詳細、お申し込みは ↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#090123

●〈日本児童文学のはじまりをたどる　巖谷小波の絵はがきネットワーク〉
講演会「巖谷小波と絵はがき」
児童文学の祖と言われる巖谷小波のご令孫で、小波の絵はがきコレクションを所蔵されている巖谷國士先生に、絵はがきから読みとれる小波の「家族」や「旅」、絵はがきの歴史などについてご講演いただきます。
・日時：12月13日（日）　13：30～16：00
・講師：巖谷國士（明治学院大学名誉教授）
・研究報告者：土居安子（IICLO理事・総括専門員）
・場所：大阪府立中央図書館 多目的室　※参加費1000円
※詳細、お申し込みは ↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#081213

● ≪ご寄付をお願いします≫
※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html
※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ https://syncable.biz/associate/19800701

■――――――――――――――――――――――――――――――――■
【２】コラム
■――――――――――――――――――――――――――――――――■
****
《１》この本読んだ？ Yasuko's & Noriko's Talk
****
『榊くんによれば、僕らは』　本多孝好/著　かない/装画　光村図書出版
2026年11月　対象年齢：中学生以上

＊今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（Ｔ）です。

あらすじ：中学３年生の榊敦史くんが９月３日に転校することになった。担任のリトぴんは「あー、榊は今日が最後だからな。みんな心残りのないようにな」と言う。榊くんは、その日から受付が始まった卒業文集の作文のＵＳＢメモリを文集委員に託す。その一日の「朝の会」から「放課後」までのあいだに11人の同じクラスの男女が榊くんとの接点を思い出す。そこには、榊くんの隠された上履きを見つけたり、榊くんと一緒に生き物係をしたりした回想があった。そして、その日、クラスの教室が荒らされたり、小さな放火事件が起こったりする。そして、５年後のクラス会に榊くんが現れる。

Ｔ：キャリアのあるミステリー作家本多孝好さんの初のＹＡ作品で、『朝日中高校生新聞』連載（2020年４月５日から９月27日）の書籍化です。
Ｙ：それゆえ、まずは、ミステリーとしてたっぷり楽しめます。

Ｔ：一番の謎は、「榊くんが提出した卒業文集の文章とはどんなものだったのか」です。また、「なぜ、榊くんは転校したのか」「榊くんってどんな子だったのか」「９月３日に起きた２つの事件はなぜ起こったのか」という謎があり、冒頭のプロローグの「その日の榊敦史の話は、こんな奇妙な挨拶で始まった。『お久しぶりです、みなさん。初めまして。榊です。榊敦史です』」とはどういうことかという謎もあります。
Ｙ：それらの答えが伏線たっぷりの文章の中から浮かび上がってきます。そして、12 章のうちの 11 章までは、榊くんが転校する日の「朝の会」から「放課後」までが、12 章は５年後のクラス会の日が榊くんのクラスメイトの視点で描かれています。
Ｔ：ミステリーの要素とともに、中学生のリアルが描かれている点もこの作品の魅力です。サッカーのクラブチームに所属していたのに経済的理由から中学生からは部活しか道がなかった里田匠は、部活をバカにしていましたが、榊くんにオスカー・ワイルドの言葉を告げられて、部活の道を選びます。
Ｙ：他にも人に頼まれて断り切れない自分に悩んでいる少女、中学受験に失敗した男子、メイクに興味があって、血のつながらない母と暮らしている少女、ヒロイン系アニメが好きで、榊くんと一緒にアニメ映画を見た２人の少年、刑事を父に持つ推理好きな少女などがいて、多様な中学生像が浮かび上がります。
Ｔ：榊くんはそれぞれの生徒に文学者たちの名言を伝え、それが生徒たちに響く。けれど、その名言が榊くんにとってはどうだったのか。また、榊くんは、上履きを隠され続けているという意味で「闇を抱えた生徒」と言えますが、一人で芸術部に所属して油絵を描いている丸山穂乃花も別の意味で闇を抱えている生徒であり、この対比も読者に考えさせます。
Ｙ：中学生の登場人物たちは、傲慢さと幼稚さ、鋭さと鈍さ、正義感の強さと利己心を併せ持ち、アンバランスで行き所のない気持ちを抱えて生きている様子が伝わり、自分の中学時代を思い出しました。
Ｔ：教師たちのいい意味での人間らしさ、悪い意味でのいたらなさも鋭く描かれています。
Ｙ：また、結末のつけ方にも納得しました。「いじめ」を描いたＹＡ作品は多くありますが、まったく教訓的にならずに、多様な視点から「いじめ」を考えさせる作品としてもとても新鮮に感じました。

****
《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
****
第 134 回　「あけがた」
　交錯する〈おれ〉と〈私〉

〈青黒く淀んだ室の中〉で、獣医の有本や〈もやもやした区分キメラ〉たちが着物の話をしていることに、〈おれ〉は落ち着かずむしゃくしゃしています。そこへ金襴の羽織を着た霧積が入ってきて大声で笑い出し、それが癪にさわっていると今度はみんなで〈おれ〉の着物を嘲笑しはじめます。

　おれにはどういうわけで自分に着物が斯う足りないのかどう考えても判らなくてひどく悲しかった。そこでおれは立ちあがって云った。
　「あたりまえさ。おれなんぞまだ着物など三つも四つもためられる訳はないんだ。おれはこれで沢山だ。」

ぷいと外へ飛び出した〈おれ〉は、洪水のあとで非常な水勢の川を上流に向

けてのぼっていきます。向こうに見える〈大きな島〉へ渡ると、そこには〈まっしろなさるのこしかけ〉や、〈志木、大高と彫られた白い二列の文字〉がありました。そして〈ここの測量に着手した〉と名乗る志木に出会い、〈おれ〉が志木とは〈どこかで聞いたぞ〉と思うところで、物語は終わります。

めまぐるしく変転する場面展開に、さながら夢の中を彷徨っているような感覚になる作品です。青黒く淀む室内で、どこか息苦しさを感じていた主人公が、水や光が白く輝くほうへ向かう物語でもあります。何もかも押し流す洪水のような川は、心の中で渦巻く〈おれ〉の怒りや悲しみを映し出しているとも、あるいは〈着物〉という虚飾に執着する世俗の汚れを根こそぎ洗い流す浄化装置とも読めます。

ところで、本作の語りは基本的に一人称で〈おれ〉と表現されていますが、一箇所のみ、〈私〉となっているところがあります。川を渡りきり、大きな島に立っていることに気づくシーンで、〈そしていつかもう島の上に立っていた。どうして川を渡ったろう、私は考えながらさびしくふり返った〉とあります。そのあと、島を歩き出し志木と出会う場面では再び〈おれ〉に戻るのですが、この瞬間だけの表現の違いは、何を意味しているのでしょうか。夢のなかで怒りや悲しみの渦中にいた〈おれ〉が、川を渡りきった瞬間、ふと我に返って現実の自分を見つめる〈私〉になったのでしょうか。

題名が、夜と朝が交錯する境界としての〈あけがた〉なのは、夢に現実が入り交じる物語を暗示するものです。そして、〈おれ〉と〈私〉の人称の揺れには、こうした夢と現実、無意識と意識、激昂する感情と冷静であろうとする自己という、さまざまな両義性が顔を覗かせているようにも感じられます。（ペ吉）

（本文の引用は、新潮文庫版『宮沢賢治万華鏡』によりました。）

****
《３》子どもの本の珠玉のことば　８８
****

「なあ、トム。おまえの母ちゃんのこと、きかせてくれよ！で、熊は元気にしてるのかい？」
　トムはいらだたしそうに肩をすくめると、教室を横切って、勢いよく自分の席に腰を下ろした。その瞬間、インディゴの目と鼻の先で、赤毛のリーダーが手を伸ばし、トムのいすをさっと引いた。
　トムは、気持ちが悪くなるような大きな音とともに、なにもないところに腰を下ろし、教室は笑いに包まれた。

（『インディゴの星』　ヒラリー・マッカイ/作　冨永星/訳　小峰書店　2007年７月　p.75）

対談で「いじめ」がテーマの作品を取り上げたので、ほかにどんな作品があるかなと「本の海大冒険」を検索して思い出したのがこの作品です。主人公は、もうじき 13 歳のインディゴ少年。大学生の姉キャディー、同じ学校にいる姉で養子の 14 歳のサフラン、８歳の妹ローズ、死んだペットの肖像画などを描いて売っている母のイヴ、そしてロンドンで画家として暮らしている父のビルの大家族の一人です。

病気で１学期休みますが、その前からインディゴはワルガキ連中からいじめられ、病気が快復して学校へ戻ると、またいじめられます。けれど、そこに姉のサフランとサフランの親友のサラが来て、ワルガキ連中のリーダーをやり込めます。そこで、ワルガキ連中は次のターゲットをアメリカから転校してきたトムに定めます。

引用の部分は、ワルガキ連にいじめられているトムが抵抗し続けているにもかかわらず、イエローストーン国立公園で熊の保護をして働いているトムの母をからかい、椅子を引くという卑怯な手でいじめられた場面です。トムは、涙を流し、インディゴはトムを教室の外へと連れていきます。トムは一人になりたいと非常階段に出て雨に打たれ、インディゴは上着を貸してトムの持ち物を取りに行きます。

そこから、インディゴとトムは少しずつ仲良くなり、インディゴの妹のローズもトムと知り合っていきます。ワルガキ連中に対してインディゴは非暴力主義を貫き、トムは抵抗を続ける中で、それぞれが「いじめ」といかに対峙し、乗り越えていくかがインディゴの家族のごたごたとともにユーモラスに描かれています。

サフランが主人公の『サフィーの天使』（2007 年 1 月）の続編で、２作続けて読むと、家族とは何か？友だちとは何か？というテーマについてもより深く考えることができると思いました。（Ｙ）

****
《４》 行って来ました！
****
滋賀県立美術館で 11 月 23 日まで開催されている企画展「丸木スマ展　73 歳からのアーティスト」に行ってきました。丸木スマ（1875-1956）の初期（73 歳）から晩年（81 歳没）までの作品や資料約 130 点が展示されていました。

展示は、全９章からなり、「第１章　スマ、73 歳絵を描く」「第２章　ひらく、スマの世界」では初期の作品が、「第３章　画壇へ」では、「女流画家協会展」や「院展」などの入選作品が展示され、「第４章　丸木家の人々」では、息子の丸木位里、その妻の丸木俊、娘大道あやの作品とともにその関係が、「第５章　「丸木スマ」はどのように受け入れられたか？」では、柳宗悦、山下清を見出した精神科医の式場隆三郎、文学者の吉川英治、石牟礼道子、水上勉等の評価が、「第６章　ピカドン」「第７章　スマが描いた広島の風景」はスマの原爆体験と広島の絵が展示されていました。「第８章　丸木スマ的曼荼羅」には、スマの晩年の作品が並び、「第９章　絵は誰でも描ける」では、スマの作品とともに来場者も絵を描くことができるようになっていました。

全体的に自由でのびのびとした作風で、描くのが楽しそうに感じました。紙のすみずみまで隙間なく色がぬられていることで、絵の世界が丸木スマの頭の中にある特別な世界であることが感じられ、その世界では、鳥やにわとりも猫や犬やそして木や花も一つ一つに命があって、かけがえがないという思いが伝わりました。絵から動物の体のあたたかさが感じられるような気がしました。

その中でも、「にわとりと八重椿」は、咲き乱れるピンクの八重椿の木の下ににわとりが群れているにもかかわらず、それぞれが別の方向を向いてとぼけた表情に見える様子がおもしろいと思いました。「白い鳥」は腰に手をやって

いる女性とその背後にいる子どもが２羽の白い鳥が飛んでいくのを見つめている絵ですが、１羽の白い鳥は下降ぎみで、もう１羽も背後を気にしているような目をしており、いろいろな想像が可能です。「柿もぎ」は、柿や菊より人間が小さく描かれていてユーモラスに感じました。

好きなものや気になったものを大きく描いたり際立たせて描いたりする手法は、子どもの頃に絵を描いた気持ちを思い出させました。そして、広島の原爆体験があることからこそ人間とは何か命とは何かを考えさせる絵になっているんだなと思いました。（Ｋ）

滋賀県立美術館　https://www.shigamuseum.jp/

****
《５》 宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第 35 回
****
第７章　天沢退二郎先生
その３　『光車よ、まわれ！』とオレンジ党（上）

1982（昭和 57）年２月 13 日の夕刻、パリ 10 区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内されました。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023 年）でした。
この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

＜本編はこちらから＞
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

****
《６》 富安陽子　ＩＩＣＬＯ　ストーリーコンペ　第４回
****
第４回「富安陽子　ＩＩＣＬＯ　ストーリーコンペ」を開催します。
２つのキーワードを使った童話作品を募集します。400 字詰め原稿用紙５～10 枚で、未発表作品に限ります。

◎第４回のキーワード…「風見鶏」「自転車」

募集期間：11 月 20 日（金）～令和９年２月１日（月）
富安理事長がおもしろい作品５～６点を選び、２月 20 日（土）のメールマガジン NO.198 で発表。その後、読者にいちばんおもしろいと思った作品に投票していただき、１位と２位を決定します。
＜詳細、応募方法はこちらをご覧ください＞
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

■－－－■
【３】全国のイベント紹介
■－－－■
●日本児童文学学会　第 65 回研究大会
講演会「妖怪と子ども文化　－化物からポケモンまで－」
講師：香川雅信（兵庫県立歴史博物館学芸員）

日時：12月5日（土） 14：15～15：45 ※有料、要申し込み
会場：大阪樟蔭女子大学〔東大阪市〕

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html
※イベント情報をお送りください。当財団ＨＰに掲載させていただきます／

■―――――――――――――――――――――――――――――――――■
【４】プレゼント
■―――――――――――――――――――――――――――――――――■
今号のコラム《１》「この本読んだ？」で紹介しました『榊くんによれば、僕らは』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。
応募フォーム⇒ https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A
締切は12月10日（木)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編｜集｜長｜の｜つ｜ぶ｜や｜き｜
本格的な冬になる前になんとか紅葉を見ておこうと車で奈良の長谷寺に向かいました。途中渋滞に巻き込まれ、駐車場も山門に近いところからどんどん離れていき、やっと駐車完了です。紅葉はいま少し早かったけれど、鮮やかな朱色によみがえった五重塔を楽しみました。そして、食欲の秋だとばかり、沿道の茶店のにゅう麺を味わい、おなかも満たされました。（ＴＡ）
―――――――――――――――――――――――――――――――――

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。
原則として返信はいたしませんのでご了承ください。
●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
●配信の登録・解除・変更は、
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html
●このメールの送信アドレスは配信専用です。
●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 http://www.iiclo.or.jp/
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

―――――――――――――――――――――――――――――――――